

Title	<書評> Michael Gardiner, "The Dialogics of Critique : M.M.Bakhtin & the theory of ideology", Routledge, London, 1992
Author(s)	柏原, 全孝
Citation	年報人間科学. 14 P.136-P.140
Issue Date	1993
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/5291
DOI	10.18910/5291
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Michael Gardiner

*The Dialogics of Critique:
M.M. Bakhtin & the theory of ideology*

Routledge, London, 1992

柏原 全孝

M・M・バフチンは七〇年代に再発見され、八〇年代には英米圏を中心に議論的になる重要な理論家の一人となった。彼は前世紀末に生まれ、戦間期から著作活動を開始し、ロシア革命以降のスターリン時代のおおりを受けながら一九七五年に没するまでソ連国内でもほとんど無名の理論家として研究活動を続けていた。

バフチンの再発見のきっかけとなったのはラブレール論、ドストエフスキー論などの文学研究書である。以後、それにまつわる作者と主人公の研究、文学形式の研究など文学の領域での研究が注目を集めるようになった。そのため、現在までのバフチン研究のほとんどが文学研究者の手によるものとなっている。しかしながらバフチンの研究歴をふりかえると決して彼の研究対象は文学領域に限られるものではない。とりわけ、スターリン主義が表面化する以前の二〇年代頃に友人名で出版した『フロイト主義』『マルクス主義と言語哲学』などから彼が当時の思想全般を研究対象に据えていたのは明らかである。彼が個別の作家研究などの文学研究の比重を高めていくのはスターリン時代に流刑されて後のことである。この点を考慮するなら、バフチン研究を文学領域に限らず、社会科学も含めた幅広い観点から進めることも必要なのだ。そして、ようやく本一冊を費やしてバフチンを文学以外の領域で議論した研究が現れた。それが本書である。

本書の目的はバフチンのイデオロギー概念を現代の各種のイデオロギー論と比較検討することである。この目的に沿って本書は、まずバフチンのイデオロギー論の議論に必要な彼の著作を年代順にま

とめた後（1、2章）、続いて古典であるマルクスから最新のフーコーまでのイデオロギー論とバフチンのそれとを比較対照する（3、4、5章）。3章以降で議論にのぼる理論家はマルクス、ガダマー、ハーバーマス、バルト、フーコーらである。ここでは彼らすべての議論をとりあげることができないので、特に今後の議論で問題になると私が判断したマルクスとフーコーの二人とバフチンとの理論的関係についての論述を見ることにする。

一・バフチンのイデオロギー論

まず、本書に従ってバフチンのイデオロギー論を整理しておくべきだろう。断っておかねばならないが、スターリン時代という特有の社会状況のためかバフチン自身は自分なりのイデオロギー論を明示的に示したことはなかった。そのため、彼のイデオロギー論を論じるには彼の著作の中のイデオロギーに関する断片をつなぎあわせていかねばならない。その際、最も多くの、内容豊かな断片を提供してくれるのが『マルクス主義と言語哲学』である。そこで、この著作を中心にバフチンのイデオロギー論を本書に沿って箇条書きにして要約してみる。

①イデオロギーと記号は不可分である…イデオロギーは何らかの物理的身体をもつ記号に必ず担われており、また記号はイデオロギーの担い手であってはじめて記号たりうる。ただし、イデオロギーと記号が一義的に対応するとは限らない。

②記号はそれ自体現実であるが、同時にその外部の現実を屈折して

反映する…旧ソ連国旗の鎌と槌は、生産手段として、国旗の図柄として現実中存在するものであるが、労働者を屈折して反映したもの（直接的に反映していないもの）でもあった。さらに、旧ソ連の解体により、鎌と槌は否定的な意味を持つ記号へと転じた。外部世界の反映としての記号の好例である。

③記号は人間の相互作用の中でのみ生命を持つ…記号の意味はそれをそのようなものとして解釈する他者を必要とする。従って、対話状況を基本とする日常的な社会の文脈の外では意味を持ちえなくなり、記号として存在することが不可能になる。

④記号は人間の意識の存在基盤である…記号に對置できるのは記号だけであり、人間の意識が記号に応答するのは人間の意識が記号によって成立しているためである。③と併せて考えると、人間の個人的、内的な意識というのは本来的に社会的な存在である記号に充たされるのであって個人意識なるもの自体がイデオロギー的社会的事実ということになる。

⑤記号の形態はその具体的な状況、日常生活状況から分離できない…記号の意味内容のみならず形態も問題となる。例えば、発話された記号の場合、その状況とアクセントの位置が意味内容に影響する。

⑥記号の中で最も記号的なものは言語である。

⑦記号がイデオロギー闘争の舞台となる…「共産主義」という記号が冷戦下でイデオロギー闘争の的になった例がまさにこれである。

以上がバフチンのイデオロギー論の要約である。この要約からバフチンのイデオロギー論は記号（言語）と極めて密接な関係にあり、

現代のデイスクール論の事実上の先駆けであったことがわかる。では、この要約を踏まえて、本書におけるマルクス、フーコーのイデオロギー論とバフチンのそれとの比較を検討する。

二、マルクスとバフチン

イデオロギーという言葉が「ナポレオンの嘲笑によって広まっていた批判的鋭さを付され、今日広く浸透するようになった」のはマルクスの著作によるところが大きい（D・マクレラン）。その意味でイデオロギー論の眞の創始者と言えるマルクスとバフチンを比較対照するわけだが、意外なことにバフチンとマルクスの理論的關係を詳論した研究はこれまでほとんどない。むしろ、バフチンからマルクスの要素（マルクス主義的要素）を排除する傾向の方が強力であった。これはおそらく、バフチンの生きた時代背景ゆえ、マルクスの名やマルクス主義の術語は彼が研究の便宜上利用したにすぎないと考えるのが当然のように思われたためであろう。確かに、バフチンには古典的なマルクス主義の術語を無理を承知で用いているように見えるところもあるが、逆にそれらをすべて差し引くことは賢明ではない。本書がマルクスを取り上げたことはバフチン研究の上で重要なことである。

さて、本書ではマルクスのイデオロギー論として初期の草稿の一つ『ドイツ・イデオロギー』が採用される。観念論批判のためのイデオロギー批判という草稿の性格からマルクスのイデオロギー論は「イデオロギー＝虚偽意識」論と解釈される。本書では特にこれを

「支配的イデオロギー論」と名付けている。その特徴として①支配的イデオロギーの従属階級への効果がア prioriに前提されること、②支配的イデオロギーの支配階級への効果の説明が不十分であること、③支配階級の信念や価値観が社会全体へ移転するための制度と装置の同定、分析が失敗していることなどが挙げられている。これらと先の要約でのバフチンのイデオロギー論を対照させると明らかに両者は対立的であることがわかる。つまり、バフチンのイデオロギーはあくまでも具体的現実であるのに対し、マルクスのそれは抽象的な観念レベルのもの、すなわち虚偽意識でしかない。本書では根本的に相容れない概念を両者が持っているために両者の論じる内容が全くかみ合わないものとされ、一方的にマルクスに批判が浴びせられている。

本書の議論をまとめると以上のようになるが、これには問題があるように思える。根本的な問題となるのはマルクスのイデオロギー論が『ドイツ・イデオロギー』という初期の草稿、しかもエンゲルスとの共同の草稿だけで語られていることである。もちろん、マルクスも観念論批判を展開したわけだが、イデオロギー＝虚偽意識という考えを推進したのはマルクスではなく、むしろマルクス主義の創始者たるエンゲルスの方である。イデオロギー批判＝観念論批判という論点に本書が捕らわれすぎたゆえマルクスとエンゲルス（マルクス主義）の区別が曖昧になり、このような誤解に基づく議論が生まれたのであろう。

マルクスのイデオロギー論は初期の草稿、著作よりも『資本論』

を見るべきではないかと私は考える。それは商品の物神性論を含む『資本論』1章、2章がマルクスのイデオロギー論の根幹であると考えられるからである。例えば、S・シジェクは『資本論』1章、2章の検討の後、「イデオロギーは単なる誤った意識ではなく、その現実そのものである。……イデオロギー的なのは参加者がその本質を知らないことを前提としているような社会的現実である」と言明する。これと、先に要約したバフチンのイデオロギー論との間には本書で述べられているような両者の相容れない関係しかないとは思えないのである。むしろ「商品」記号」「使用価値と価値」記号形態と意味内容」「商品交換」対話」などといったアナロジは両者に密接な理論的關係があることを示唆しているように思える。この点がこれからの研究によって明らかになれば、今後のイデオロギー論に新たな局面を切り開くことができるかもしれない。これは我々の課題と言えよう。

三、フーコーとバフチン

フーコーはイデオロギー、言説（ディスコース）、権力の三者を包括的かつ具体的に研究した非常に重要な理論家である。本書がフーコーに相当な紙数を割いているのも当然であろう。では、前節同様にまず本書におけるフーコーのまとめとそれに続くフーコーとバフチンの比較を概観した後、それを検討していくことにする。

マルクス主義の場合、イデオロギーは下部構造に起因する虚偽意識とされ、科学／イデオロギーという二項対立図式の中で真偽レベ

ルの問題において語られるものであった。これに対し、フーコーにとってイデオロギーは抽象的な意識とか偽りのものなどではなく、言説という実践レベルの問題であった。フーコーのイデオロギーはあくまでも実地的、日常的な問題であり、身体の処し方、思考や発話の様式においてつねにすでに働いているものなのである。人間はイデオロギーとともに行為し、思考し、またそうしてはじめて主体となる。言い換えれば、権力の作用のなかではじめて人間が主体となるのである。この考え方からいわゆる「主体」服従」論がイデオロギー論から生まれてくる。

以上のまとめに続き、フーコーとバフチンの比較が行われる。まず、共通点としてバフチンもフーコーもイデオロギーを日常生活の場においてとらえていることが指摘される。フーコーの場合、行為、身体まで含めて議論されるが、少なくとも両者とも日常生活の中で「言語（言説）」の問題としてイデオロギーを考えている。このように日常生活においてイデオロギーをとらえる点は現在のところバフチンとフーコー以外にはブルデューのような少数の例外を除いてあまり見られない。他方、このような評価に続いてフーコーの問題点が指摘される。それは、フーコーには権力、イデオロギーに対する抵抗の契機がないため、主体が極めて受動的なものだということである。本書ではこれに対し、バフチンの場合は対話を基礎においているため主体が決して受動的な地位に落としめられることはない。バフチンの優位性が主張される。

以上が本書で議論されるフーコーとバフチンの理論的關係の要点

である。フーコーとバフチンとは本書の指摘にあるようにイデオロギーを日常生活、実際のな行為や発話のレベルでとらえようとする点で重要な共通点を持っている。その一方で、日常生活、実践における人間（主体）が能動的か受動的かという点において両者は異なる。これが議論の趣旨だが、しかし、この議論には問題があるように思われる。それはフーコーの主体を受動的なものと解釈することは是非の問題である。主体⇨受動的という解釈は抵抗の契機がフーコーの思考にはないとするところから生じているわけだが、フーコー自身権力を抑圧的なものとか実体的なものなどととらえてはいないのであるから、抵抗も抑圧への対抗などという実体的なレベルで解釈されるべきではないはずだ。適切ではないかもしれないが、電気抵抗の例を考えれば別様のフーコー解釈が可能になるように思われる。電気抵抗は一定方向の電流が流れてはじめて自己の存在を明らかにする。電流が流れていない時、電気抵抗はその働きを失っており、電気抵抗として存在していない。電気抵抗がそれとして存在するには電流が必要なのである。この例と同様に考えると、フーコーの言う抵抗は権力やイデオロギーが存在するのと同時に、またその時にだけ存在するものと解釈することができる。つまり、ある権力、イデオロギーが作用して何らかの行為がなされた時、同時にその行為は密かに抵抗が作用した所産でもあると考えることができるはずである。これが正しいのであれば、フーコーの主体を単純に受動的なものなどとはいえない。そもそも、フーコーは主体概念自体の存立根拠を問うのであり、彼の主体概念に批判を加えることは

的を射たものとはいいがたい。またバフチンにしても、主体として存在する人間を「まったく社会的・イデオロギー的な現象である」と宣言するのであり、主体概念においてフーコー、バフチンの両者を比較するのは見当違いなのである。むしろ、本書で指摘されたバフチンとフーコーの共通点をより深く探究した比較論こそが今後のイデオロギー論にとって必要と言えらるだろう。

著者M・ガーディナーは一九六一年生まれの気鋭の研究者で、現在ヨーク大学の社会学の講師である。本書は彼の処女作である。本書においてこれまでのバフチン論にはないイデオロギー論者としてのバフチンを描いている。この点はバフチン研究において画期的なことであり、評価されるべき点ではあるが、上述のようにバフチンとの比較対象となる諸理論家に関する筆者ガーディナー自身の理解に問題がある。この誤解を除去、修正することは、今後のイデオロギー論の発展のみならず、理論家バフチンのいっそうの理解にとっても重要なことである。また、本書において現代社会学のイデオロギー論者といえるブルデューや、フランス現代思想の重要な理論家たちの多くが議論されていない点にも不満が残る。

このように決して満足できる内容とは言えないが、バフチンのイデオロギー論の本格的な研究がようやく開始されたばかりであることを考えれば、これまで追究されることのなかった重要な課題を我々に提示してくれたことこそが本書の最大の意義と言えるかもしれない。